

「宗教と文化」という問題設定について

竹 田 純 郎

脱魔術化すなわち合理化と世俗化が進行し、資本の自己増殖を目的としたグローバリゼーションが世界を蓋うなかで、かつて人間の優れた精神活動を表した文化のみか、キリスト教もまた厳しい状況に置かれている。こうした状況のなかで、キリスト教のなすべき課題の一つは、諸宗教間の対話や、宗教と文化との間の対話を積極的におこなうことによって、キリスト教の自己理解を深めることである。それゆえ金城学院大学キリスト教文化研究所は、キリスト教の置かれた現在の状況と、キリスト教の課題を表した「宗教と文化」を継続研究テーマとしている。

当研究所は、この継続研究テーマに従い、2005年10月に「宗教の見る現実 科学の見る現実」というシンポジウムを開催し、そのシンポジウムの記録を『宗教・科学・いのち』（新教出版社2006年）に収録した。今年度は、宗教と科学との対話について、一連の講演会とシンポジウムを開催した。9月26日に静岡大学創造科学技術大学院准教授の竹之内裕文氏に、10月31日に関西学院大学神学部教授の土井健司氏に、11月15日に立教大学名誉教授の関正勝氏に講演をおこなっていただいた。12月20日には、南山大学教授の横山輝雄氏、椋山女学園大学准教授の音喜多信博氏、本学

教授の金承哲氏に提題報告をおこなっていただき、上記の竹之内裕文氏、土井健司氏、京都大学大学院教授の芦名定道氏にコメンテーター役をお引き受けいただき、「知の統合へ向けて」というシンポジウムを開催した。

以下、講演報告、シンポジウムの提題報告、そのコメントを掲載する（なお、三氏のコメントに関しては、表現を統一するため、竹田が各氏のコメントの表現を改めた。その責は竹田にある）。